

✿ 韓・日発掘調査交流に行ってみて

今年3月、第2回WBC大会韓国対日本の決勝戦、両国の火花が散る対決と韓国チームの底力を見せた名勝負として記憶に新しいでしょう。

この日は、私にとって韓国チームの勝利と同じくらい重要な韓・日発掘調査交流の参加中でした。この国際交流は、私ども慶州文化財研究所と奈良文化財研究所が結んだ「韓・日合同発掘調査交流協約」の一環として、2009年2月2日から3月27日までの54日間、奈文研の発掘調査に参加しました。今まで経験したことのない長期間滞在の心配と、日本文化に対する興味、そして国際交流という重圧感を抱いて日本出張の途に就きました。5週間は、飛鳥・藤原地区の石神遺跡第21次調査に参加し、2週間は平城地区の平城宮第448次調査に参加しました。途中、緊急発掘調査にも参加しました。滞在期間だった2～3月の奈良は雨の日が多かったのですが、それでも発掘調査に参加できましたし、雨天中止日は飛鳥・藤原地域と平城地域の遺跡や博物館を踏査しました。そして奈文研の先生たちの案内により、施設見学と重要遺物も実見することができました。

石神遺跡の調査は、奈文研が1981年以後継続して実施しており、今回は2008年10月2日から遺跡東限とその周辺の様相を明らかにする目的で実施していました。調査担当者によると、今までの調査成果から石神遺跡は、蝦夷や隼人などの人々や外国使節をもてなした7世紀代の饗宴施設と推定されているそうです。調査の結果、掘立柱建物群と塀を確認し、遺物は7世紀代の土器と瓦が大量に出土し、その中には新羅産の土器も出土していました。今回の調査によって、石神遺跡の規模は南北約180m、東西約130mと推定して、その全体を把握できるようになったとしています。

平城地区では、第448次調査で近代の池と溝および柱穴群などが調査されていました。参加期間中に薬師寺で雨量観測計設置に伴うトレンチ調査や、個人住宅建設に伴う調査にも2日間参加しました。

日本では発掘成果を周知させる現場説明会を開催していましたが、石神遺跡では2月14日に開催しました。説明会2日前に記者発表をして、翌日の主要日刊紙に遺跡の大略的な説明と現地説明会の日時が記事になりましたが、当日は曇天で参加者は少ない

だろうという個人的な考えは、約1600人の市民たちを見たことで変わりました。家族や友達同士が整然と並んで遺跡説明を熱心に聞き、遺跡の現状を何枚もカメラにおさめる姿が見られました。

今回、日本との交流で個人的に多くのことを見て感じる事ができましたが、その中でも現在、慶州文化財研究所が実施している文化遺跡整備事業を振り返るようにしました。とくに日本での遺跡踏査で本当に羨ましかったことは、薬師寺や東大寺など古代建築物と各種の仏像などが今までよく保存されているという点です。このような古代建築物の存在は、古代遺跡発掘調査に基礎的な資料を提供しており、発掘された遺跡の整備に多くの役に立つことはもちろん、幾多の観光客の誘致にも役立っているという点です。現在、慶州文化財研究所は、四天王寺・芬皇寺・月城塚字・新羅王京などの発掘調査を実施しています。日本のように古代建築物があまり残っておらず残念ですが、もう少し頑張って発掘調査と研究に邁進すれば、慶州という巨大な文化遺跡の復元に一歩前進できる気がします。

奈文研の発掘調査に参加しながら、昼休みの短い時間を利用して体をぶつけあい、汗をかいて、一緒にしたサッカーを忘れることができません。多くの先生たちと友達のように親しくなって人的交流の時間を思いきり楽しんだことも、個人的な成果の一つに入れることができるでしょう。

最後に、奈文研との発掘調査交流を通して私自身を振り返るきっかけとなりました。これからも両研究所が学術的・人的交流をさらに活発におこない、お互いの長所を学んで発展する関係になるよう祈念しています。奈文研の皆さんに感謝の気持ちをお伝えいたします。

(大韓民国・国立慶州文化財研究所 金 甫相、
日本語訳：都城発掘調査部 青木 敬)



石神遺跡で実測作業に参加する筆者（写真左）